【福島大学むらの大学アーカイブ 14】【大熊 Chapter 2】

つながりが生み出した大熊のキウイ

永井文成さん

【インタビュー日時・場所】

第 1 回インタビュー　2023 年 9 月 26 日・大熊町役場いわき出張所

第 2 回インタビュー　2023 年 11 月 23 日・永井さんご自宅

【聞き手】

人間発達文化学類　松田みのり　　食農学類　山口衿菜

行政政策学類　　深谷春奈、宮川結生

担当教員　鈴木敦己、実施協力　佐藤亜紀

プロフィール

震災前、大熊町で稲作農業を中心にキウイやほうれん草等、
様々な農作物を栽培していた。現在もいわき市内で稀少な
キウイ（レインボーレッド）等の栽培を継続している。

【第１回インタビュー】

―キウイは、どういうきっかけで作り始めたのですか。

永井：ちょうど40年になっか。その頃が結構、大熊で初めてつくるっていった頃で、ちょうど俺も結婚して何年過ぎて、2、3 年過ぎてか。そしたら、うちのばあちゃん（妻）か、百姓、嫌だから役場に勤めて。その前は加工トマトだ、色々作ってたんですよ。そんなのは駄目だなと思って、原発もあったからな、ここんとこさ。ほんだら何か植えるもんねえかなと思ったとき、たまたまキウイって町で言ったので、じゃあキウイでも植えてみっかって、植えたのが始まり。そもそもは町の有力者であった井上製材所の文雄さんが、どっからか（苗木）持ってきて自分の家の前さ 1 本植えて、それがなったので。それがいいってなって普及して始まったわけだ。

―その頃、文成さんはお幾つだったのですか？

永井：まだ 30 ぐらい。町の中身なんかは分かんねがった。んで俺も作ってみっかってなって申し込んで、苗木は町でただでやっから。資材もただでやっからって。棚だの何だの、材料はただでやるから自分で作りなさいっていう。棚つるってな、こう上げなさいって。お互いに用意してやったり、頼んでやったりして、こん中に作ったわけだ。

―外から先生呼んだり、自分たちで勉強会したりはありましたか。

永井：毎月、勉強会というのをやったんだ。結局、その 14～15 人だったと思ったな、最初は。もう畑さ植えとった人は。これ、3 本手法の人はまだいなかった。

―文成さん、キウイは最初何本ぐらいから始めたんですか。

永井：1 反２、３か。12～13 ある。40 本だっけか、50 本。40～50 本ぐらいのキウイで 1 反から始めて、周りも、その 14～15 人集まった人たちは、みんなそれぐらい。多い人は俺の 3 倍も 4 倍も植えてたよ。これ、だって昔だから年寄りの人でいたもの、昔は。どうせ、資材も何にもみんな持ってこないんだもん、こんなええことあっかって、畑なんか余してる人が植えて。あとは裏話だけど、どうせもらえるんだから、あとこんなのはおかしくなんだから、あと梨の木を植えればいいんだ。棚作っちまえみたいな。

―それでキウイがうまくいったのですね。

永井：これが逆になって、今度、梨屋から圧力掛かってきたんだよ、今度は。キウイが上がると大熊梨が下火になっちゃうっていう。だから、キウイがそのぐらい盛り上がっちゃったってこと。それで募集した。それで、苗木ただでやんだから植えたらええべってなっちゃった。資材もほとんど、それなら植えたらええわって、最後まで言ったからな。

俺は混ざんねかったけど、震災になる前、あれ、4、5 年前頃までも補助事業でやったの、また。4、5 年前も、またキウイ、プッシュしたんだ。だから、町がお金使ったんだ。町で出して、あとは県の土地だか、何の土地だっけ、あれ。鈴内団地っていうの、梨なんか植えたとこあるんだよ。そのあれが一部残ってたんだよ。植えたり、いろんなことしてやってた。ここを今度、この残ってる分をキウイ部会で

借りて、個人で植えたり、別のとこな。ずっと増やして。ある程度、俺は有名になっちまったからな。大熊のキウイってなったら福島県の有名なものになっちゃうからな。だから震災なかったら、もうトップを走り続けてたかもしんないね。そんな盛り上がってたんだ、キウイ。

（キウイ農家は）何軒あったべ。30 軒あったかな。最初のほうの人、何人かやめたりしてるのもいたからな。あとは、大規模って 1 町分作ってた人もいたからな。

―キウイ部会は何の組織ですか。

永井：農協の下部組織っていうか、キウイ部会。

大熊は今も、今はどうなってっか分かんねえけど、あの頃は結構、町、裕福だったから。ある程度、そういうことは補助いったもので、あと農協と町が一体になってやってたから、うまくいってたんでねえのかな。田んぼでも何でもな。キウイ部会やったべ。梨は梨の会やってるし、畜産は畜産の会やってたから、めいめいやっから。

―他の近隣町村にキウイ農家はいましたか？

永井：いねえ。これも(震災の）4、5 年前は浪江で始まったんだ、少しね。だから大熊いいなっつって、まねするかみたいな。これも結局、もうみんな農協合併したでしょ。だから農協職員が、浪江の人が大熊さ来て。キウイ部会の指導の親方になったりまったりしてくると、大熊のキウイ、こんなにいいから。おら、もう梨畑やめる人いっから。借りてやるわとなって始めたのがきっかけで、何本か、3 人か 4 人いたんでねえかな、浪江で。浪江も梨、ただにすっからな。

―キウイはどこに売り出してましたか。

永井：出荷は、主に大半は個人売買だな。それを何トン出したべ。仙台（の青果市場）とか。大半は、みんなお客さんが持ってって。みんな毎年、来っからさ。

東京からでも、どこでも来るわ、結局。売ってもらうでしょ。最初のうちは、こっちから親戚が送ってやるでしょう。そうすると住所あっから、今度、住所頼りにおいしかったら、また来るわけよ。だから口コミっていうようでさ。自分で、向こうで郵便なり電話でよこすわけや。

あとは、くずは直売でやる。くずキウイは、あそこのいわきの、今のイオンか。前のサティさ出してやる。あれも農協経由で直売しちゃったから。くずも何にもねえんだ、大熊。

―大熊のキウイは他の地域のキウイと比べて、どういうところが魅力ですか。

永井：やっぱり甘みだべな。まろやかな味っていうか、糖度っていうか。

（初めて作ったキウイも）おいしかった。最初は、さっき言ったとおりキウイなんて何でもいいから、ぶん投げておけばいいと思ってたから。そしてもうおらも受粉なんかしねえから、しねえで、おやじは受粉やってたんだよ、こうやって。それで会社さ行ってたから、それでみんなに欲しいか、もぎってけって。そして、もぎっていったりまったりして。

―どうしておいしいキウイが栽培できたのでしょうか。

永井：結局、野菜作ってたとこで作ったから。堆肥なんかも余計入ってたから、うまくできたんだと思うが。どうしても堆肥類を多く入れねっか、うまくできねえ、おいしくできねえからな。これもキウイなんて技術がねかったわけだ、全国では。だから技術が、普及所の先生だって、どうやっていいか分かんない。毎月 1 回、呼ばったり、普及所の先生、呼ばったりまったりしてんだけど、どうやってやったら、いや、普及所の先生に剪定してもらったら 3 年はなんねえからな。乱暴に剪定して 3 年は駄目だよって。そのくらいだったから、技術がなかったわけだ。だからこういう産地は育たねかったんだべ。大熊の場合は、幸いキウイの本家本元であるプロモートっていうの、あんだよな。キウイの親分がいんだ。全国の親分。日本アグリプロモートって会社な。それがうまかったので、それから毎年、技術指導だの何だので呼んだり、そういうのさ混ざってたので、結構、こういうとこで技術覚えたのでえがったんだと思うんだ。日本キウイフルーツ協会に入ってたんだよ。入ってたから、結局、年に 1 回、全国大会だし。そして、それも会場全回りして、大会を大熊でも 1 回やったんだよ。だから結局、運えかっただか、ほういうとこ多分、入ってたから、こう技術的にも伸びてきたし、あと他のも現地研修してたから。

ほうして、そういうプロモートとの研修、大会さ行くときには。そして行って、見てきたりまったりすっから、それで覚えて、みんなうまくなった。だから技術的にもえがったど、大熊は。あっちこっち研修さ行って。

―大熊でキウイを作るのに一番こだわってたことは何でしたか。

永井：一番、みんなでこだわってたのは味だな。農協の 2 階でみんなで毎年キウイ 2、3 個ずつ持ってきて味比べやってたから。そして、これはうまいが、これはなんぼうまい、なんばうまくねえ。だからおのずから、みんなお互いに競争したわけだよ。だから結局、個人売買だから、俺もうまくねかったら、お互いに競争やってたわけだな。だからいろんなこと、俺は俺なりに。梨屋さんの辺りに聞くと、結局、化成肥料は補助的な肥やしにしなさいって。あとは、みんな有機質でやりなさいっていうのが一番、味がいくなるっていうことなんだよ。

―お金の面では町からいろいろと支援はあったんですか。

永井：ありましたな。田んぼは田んぼなりに結局、協同でライスセンターみたく、ああいうことをやれば。結局、機械の補助うんぬんなんかはあった。施設のつくってるような補助でな。このやっていくのが容易でねえんだよ、あれは。俺もやったけど、30 年やったが、ライスセンター嫌になっちゃった。えがった、ほら、震災になって。でなきゃ、今頃までやらせられんだっけ。

あれは稲刈って、もみ乾燥して、もみずりしてんだ。乾燥も、みんなあそこでもみずりもやるのがライスセンターで。ライスセンターで買って、農家は農家で、個人でやるのは個人で別だわい。出荷も、農家で食いぶちもみんな、食い米もあそこさ、ライスセンター持っていくだわい。そしてやってもらって、食い米は自分で持って来る。

生もみをカントリーさ持っていくと、みんな乾燥して、みんな計算して、ちゃんとお金で返ってくるだけ。出荷しては、カントリーでは。個人に別々にしてな。カントリーの場合は個人も何にもねえ。もう混ぜちまうからね。

（ライスセンターもカントリーも）管理が容易でねえ。やってもらう人はええ。手抜きだ。あそこで働く人は大変だ。

―原発との関わりについて教えてください。

永井：（生まれたときには）できてない。高校卒業した頃に原発の工事が始まった。
（勤めていたのは）東電の周り。東電不動産（東双不動産）っていって、最後は、あの周りの緑化っていうか草刈りしたり、あとは植木の手入れしたり、緑化管理。

―農業もしながら、東双不動産でも働いていたのですね。

永井：そうそう。最後は農業は補助みてえなもんだったわ。だって、農業は何ぼ作ったて低収入。何町作ってたって、ろくな収入ねえんだわ。
（東双不動産を退職したのは）65 歳。それからホウレンソウやってたんだ。

―夫沢辺りでホウレンソウを作り始めたのは誰ですか。

永井：あれ、一番最初に作ったの、俺だべ。ホウレンソウは浜でねっか駄目だから。夏、涼しいとこでなきゃ駄目だから。最初は俺のうちも川、ずっと海までつながってたから。浜沿いの風、ずっと来っから、俺のうちまで。家中が全部涼しかった、昔。だから、うちの目の前でホウレンソウもできたわけだ。夏でもな。だけど最後（震災）のとき、最終的には海のほうに土地借りてやったんだけど、途中、枯れてな。
俺は愛宕神社の下の夫沢川の河口にある畑でやってたんだけど、その後、農協でホウレンソウ団地にして（栽培していた）。あそこの川も満タンに橋のとこまで波があって。（津波で）あの(橋の)上さあったホウレンソウのハウスまでなくなったもん。
キウイの剪定を送りたくて、うちで剪定やっててホウレンソウのとこにいなかったから（津波に巻き込まれなくて済んだから）いがったんだわい。でねかったら、海さホウレンソウと一緒に行っちゃっ(て)たわ。

―津波が来たことには気づきましたか。

永井：分かんなかったわい。あれ？　うちの屋根壊っちゃのなんてキウイの剪定やってたら（息子の）誠来たから。おやじ、ハウスなんかねえどはなんて。何だいっつったら、「津波でみんな持ってかれちゃったわ」って言われて。それまで分かんねかったわい。
津波なんて来ねえと思って(いたんだもの)。
だって、こんなもんだわい。年中、海さ、海のそばさいる人は。こんなに大水来たって、津波ハウスの根っこまで来たとき、一回あっかぐれえだから。それ、ハウスの上を、はるか上までざんぶり来たなんて思わねえよ。

―地震が起きたときはどこにいらっしゃったんですか。

永井：屋根落っこってんなって、家の前(のキウイ畑で)見てたんだわい。それで地震酷くて、今度、キ

ウイの木さ捕まったんだもの。そのうち（息子の）誠来たんだわい。分かんねえけど、ハウスなんてねくなったんだか何だか分かんねえ。

―東電不動産に入って仕事を始めたのはお幾つのときですか。

永井：東双不動産っていう会社は20年くらいいたかな。その前は似たような仕事やってたんだ。結局、東双不動産がそういう仕事をめいめいやってたのを、こっちの近場の緑化っていうか、管理とかそういう。こういうのを今度、みんな入らせて東双不動産っていう会社つくってまとめちまったわけだ。そして一緒に行ったわけだ、おらは。その前から、だから何年たってるか分かんねえわ。

―高校卒業したときは、最初はずっと農業をしてたんですか。

永井：百姓やってた。ずっと農業。（会社勤めを始めたのは）ライスセンターのあった頃だから、昭和50年ころだな。昭和54～55年より前か。昭和52年にセンター造って、東双不動産会社もできたんだから、その前だから、昭和四十何年か。30歳頃からだ。

―１Ｆができたことによる生活などの変化を教えてください。

永井：原発できてよかったのは、あれだべな。みんな生活が向上したからいかったんじゃない？　東京さ行くより良くなったんでねえのか。賃金は東京並みで、生活が田舎だもの、おのずといい生活になってくる。悪いのはあれだべ、車ばっかりぶんぶんって、うるせえ(こと)ぐらい。車はすごかったわ。だって1日、2000人も3000人も人いんだもん。

―自宅の近くに原発ができたことによる環境の変化はありましたか。

永井：あるのはあったけどな。土地っていうか川のそば歩くと穴だらけで歩かねえくれえ、トロロイモ掘りで穴だらけにしらっちゃ(とか)。結局、あとだんだん厳しくなって掘れねくなったけど。

最初は東電で原発の放射能のあっとこで働いてる人らはここを歩くと放射能が出っと、びーっと鳴る、あれは持ってるっていう。そいつを今度、悪用している連中がいるのよ。

わざわざ放射能漏れるっていうとこさ、そのバッチを持っていって、びーってやって、放射能強くして、きょう、俺はいっぱいですってやって上がっていくんだわ。そして帰ってこられねえから、あの辺でうろうろしなきゃねえから。表、出てきて、今度、イモ掘りだの、やってんだよ。

―原発事故前に、原発があることに対して不安はありましたか。

永井：ねえって言ったら、うそだな。だって事故を聞いてるもの、中で。大きい事故っていうのか、ちっちぇえのがな。配管漏れとか、そんなの出てるもの。発電所の中で。こそっと母さん(が)役場(で働いている)ときは放射能測るのを借りていってやってみたけど、でねかったけども。発電所の周り、うろうろと。1 カ所、強いとこあったけど、あれは昔、聞いてみたら、こんなにやかましくねえ頃は、何、構わず穴掘って埋めたらしい。そういうとこだ。何やってっか分かんねえ、昔は。ちゃんと管理されてないとこは、ちょっとはあったもの。

―農業の面でも不安はありましたか。

永井：風評被害かな、やっぱりな。やっぱりあったわい。（震災前に風評被害は）ねがったけど、これがあんでねえかっていう心配(はあった)。自分だけだけどな、思ってたのは。他の人は、どう思ってんだか分かんない。だって、さっきも言ったように、俺は中さ入んねえけど、中さ入ってる人らが、あそこでこんなことあったよ、ここでこんなことがあったよって(言っているのを)聞くと、いつ(放射線が)表出てくっか分かんないもの。何ぼ厚いコンクリの中さいたっつったって。そして表と、その中の境の部屋は誰でも歩ってるから分かってるもの。だって戸開けて、向こうは管理区域だ、こっちは表だって、シャッター１つだど。フォークリフトで、品物行った来たしてんだど。二重にこうなってんならば分かる。何ぼ放射能薄いったって行ってきたんだもの。これを知らない人はそんな心配しない。

―小学校はどこに行ってましたか。

永井：小学校は熊町小学校。最初は分校だったけどな。夫沢分校って。今、跡地。そこ（に）は小学校1 年生の頃から、4 年生まで（通ってた）。5 年生になったら、熊町小学校まで行くんだ。5 年生から混ざる、戻ったわけや。
分校は 1 年と 2 年で 1 教室。1 学年 10 人いねえな。1、2 年生合わせて 20 人いない、10 人ちょっとぐらい。本校さいくと 2 クラス。80 人くれえいたのかな。（本校と分校の境目は）ねえんだ。好きで行ったんだべ、あれ。

―徒歩で通っていたのですか。

永井：どっちも歩いて通ってた。4 キロ。毎日 1 時間ぐらいかかるよ。
　今みたくスクールバスなんかねえもの。路線バスも走ってなかった、その辺は。
　気の利いたのは、ちょっと高学年になると中古の自転車（で通ったん）だべ。

―集落には何軒くらいありましたか。

永井：80 戸か。1、2、3 区と分かれてっから、夫沢の 1 区だけで 80 戸。その上さ、今度、2 区っていうのがあるんですよ。長者原。あれが 2 区だ。3 区は 3 区で、中央台だからいっぺえ。3 区は駄目だね。あんなにいねかったんだけど、東電関係で(人が)増えたから(家も多かった)。だから 3 区は(昔は)一番少ねかったんだ、あれ。だって、山だもん。今は開けたけど、あれ、みんな山だったんだもん。

―どこの中学校に通われましたか。

永井：熊町だよ。今の小学校と同じとこだ。小学校も中学校も、あそこにまとめてあった、昔。裏が、今の町営住宅になってる。あれが中学だ。

―夫沢ならではの、ちっちゃいときの遊びや食べ物の話はありますか。

永井：昔な。あれは小学校か、中学校か、よく学校から帰ると、すぐ海へ行ったんだ。それでホッキ船を足で引っ張りさるんだ。今は港だけど、昔は砂浜で、大きい船で入るしかない。下から。今度出てく

んのは容易でねえから、みんな綱引っ張りとなって、船を綱で引っ張ったんだ。
　子どもでも大人でも、みんな引っ張って。
　そうすると帰りに大きいもの二つ、三つ。切って食べたんだわ。あとは本当の小さい頃、学校に上がる前だな。夫沢の河口で親たちが、海の水をくんで塩を焼いたんだ。腐って海で持っていかれて今は跡地もないな。
　あれが大変なんだわえ。歩っていくのが大変なんだから。小さいから、親は本気になってくっついていくのが容易でない。向こうに行って、大きくて熱い釜だから。

―塩焼きはいつまでやっていたのですか。

永井：俺が小さい頃だから分からない。なんせあそこまで通うのが大変だった。
　（勤めではなく）個人でやっていた（から各家で釜を持っていた）。もう釜はないや。上のやつもないな。みんな腐って、ぼろぼろになっちまった。

―震災前と比べて農業をする上で変わったと思う点はありますか。

永井：やっぱりさっき言ったとおり、今は気候の変動かなんか分かんないけど、やりづらくはなったな。今から農業やっていくには北海道でも足りない。震災前なんか、サクランボ農家が北海道に行った話を聞いた。もうこっちではサクランボできないから。だから米は今年辺りはどうなんだかなと思って、腹白にならないかな。土地は、近所の農家さんから借りてやってるのですか。

―販路は確保してあるが働いてくれる人がいないという問題をどうお考えですか。

永井：いろんな農家に分割して任せるようにすればいい。そして、まとめて出荷する。これは A さん、これは B さん、ここは C さん、これは D さんっていって、希望者にやらせて、そしてまとめて出荷、まとめて大きくして。まして大熊でなんかやっと半公共みたくしてっから、働く人は働かねえさ。競争意識を上げて、働けば働くほど収入が上がると、こんな上がっておのずと競争意識、上がるから。量を取らなきゃ。量取れば、それなら市場に上がっから、そうするとお互いに競争になるから。誰だって欲があるから働くのだから。公務員だと欲がなくなる。

―現在の大熊町の食べ物をどのような人に食べてもらいたいですか。

永井：大熊町は、やっぱりみんなに食べてもらうには、大熊町自体の人が先に食べてほしい。イベントのときにはイベントなりに、町ぐるみで無償でも何でもいいから食べさせないと駄目。これは大熊で作った品物だ。

―そのためには何をするのがよいと思いますか？

永井：大熊の施設辺りで、キノコでも作ったらいいんじゃないかなと思ったんだよな。ただ、ちょっとばっかりやったでは、本気になんないから駄目だって。何事も品物をちょっと作っただけじゃ駄目。ただし、できんならよそでやってねえことをやんねえきゃ駄目。よそにまねされるから。よそにまねされたら負けなんだから。大熊っていうハンディがあるから。よそでやってねえものならハンディも何にも

ねえだろ。テレビで宣伝するとか、大きくしないことには駄目。ハウスが空いてるなら、ハウスの一部でも仕切って何かをやればいいんだ。ただ、補助絡みだから縛られるんだよな、日本の法律ってな。空いてんだもの使ったらいいのに。

【第２回インタビュー】

―キウイ栽培が大熊町で流行った一番の理由は何だと思いますか？

永井：一番の理由は、大熊町に井上製材所の文雄さんがどっからか苗持ってきて、うちの前に植えてなったから。

　それを大熊でもやったらどうかなと思ってやったのがきっかけでないかなと思うんだけど、はっきりしたことは私は分かりませんけど、こんな話、来てたことがあるんです。それがある程度、議員をやっていたんだけど、議長をやっていただか、何かやっていたか、ある程度、有力者だったので。

　それが議員をまとめて、各有力者に苗配ったり、ある程度、募集して、自分の製材所関係の人だの何だのをさ、募集っていうか、そういう人に栽培を勧めて、それさ輪かけて、われわれが、それを何人かがくっついて、それが始まり。それで、われわれは何も分かんねかったから、キウイなんて。ただ、植えておけば物になると思って、棚はキウイの棚はどんなまねして作ったって分かんないから、ただ、キウイの棚もな、あの頃はいろんな棚あったんだよな。

―みんなそれぞれ好き勝手工夫していたのですか？

永井：山型みてぇな置かずに棚つったんだけど、文化センターの裏でな、やってたんだけど。私らは平棚か分かんねから、平棚たーんとつったんだけど。だから、分かんないから、つぶれた棚もあったし、最初だから。キウイなんて、そんなに荷かかっと思わねえからな。

　重さに耐えらんにから、みんなつぶれたのもあるし。結構、苦労したわけです。それで、分かんねえから無我夢中で、ほいって指導も何にもできないから、栽培の方法もできないから、結局、この前も言ったけど、プロモートって、全国プロモート。あれにそれの、そのプロモートのキウイの栽培の方法がプロモートでも教えてくれっから、それら入って教えてもらったわけなんだ、ある程度は。それがきっかけで、ある程度だから、プロモートあったから、あそこまで伸びたでねえかな。でねかったら、そんなに伸びねかったんでねえかな、右も、訳分かんねんだから。大体、その井上さんだって分かんねえで、ただ、持ってきて、井上さんも棚つって１本植えたったのがなったから、これはいいとなって、やったのが始まりだから。

―キウイ栽培について分からない状況でも、誰もやめたりしないで、

いろいろ頑張られたのは、どのような思いや気持ちがあったんですか。

永井：最初は半分くらいは、面白がって作ったんでねえのか。そのうち、実がなって、ある程度、店で売っているのが、あんまり酸っぱくて、食えねかったから。いざ自分で取ってみて食べたら、ある程度、甘かったから、これはいいとなって、それが普及した原因でないですか。

―震災前の大熊町の強みはなんですか。

永井：訳が分かんねえんだよな。こっちさ来て、2本、3本キウイ作ってんだけど、大熊さいるみたいなキウイはできねえもんな、いわきでは。俺も友達も作ってんだけど、もらって食べっけど、やっぱり大熊の味は出ねえもんな、ここは。気候のせいか、土地のせいか、分かんないけどな。ヘイワードはな。レインボーレッドはどこでも同じだから、あの味は。

あれはどこでも同じで、長持ちしないし、量は取んにいから、あんまり。普及しねだけど、あれは。食べてはうまいんだけど、あれ、保存効かねえから。ヘイワードだと、うまく保冷庫さ入れておくと、お盆頃までは持つから。だから、1 年中、キウイ食べられるんだ。だから、商売やんには、やっぱりヘイワードにはかなわねえんだ。

―大熊町の強みで、これからも残してもらいたいものってあったりしますか。

永井：大熊では、月例会っつって、毎月、講習会やってたんですよ。栽培のな。だから、お互いに技術はお互いに統一してたみたいですな、大体は。個人差は何ぼあっけどな。だから、そういう面では大熊はみんな大体、平らでねかったかな。

―キウイ部会以外の部会も月例会を行っていたのですか。

永井：梨部会は月例会はねえでねえか。月例会やっていたのは、だな、野菜の俺、やっていた、ほうれん草か、ほうれん草部会も月 1 回やっていたな。

―文成さんが月例会の主催者ではないのですか。

永井：違うのよ、違う。みんなして月例会やっぺってなったわけだべ。

―ほうれん草もキウイと同じくらいの時期に大熊で栽培し始めたのですか。

永井：大熊では本当だな、始まったばっかりだったわい。双葉（町）が始まったから、双葉さんのまねして始まった。

双葉がほうれん草やっていて、ちょうど、仕事があの辺、私、東電さ勤めてたから、あの辺、うろうろ行ったり来たりやっていたから、眺めて、これはいいなと思って。それで、双葉から教えらって、それで始まったのよ。大熊でやな。大熊でみんなで作るようになったのは、震災前何年だ、5、6 年前だべ。

補助事業で始まって何ぼもたたねえうちだもんな、震災になったの。あれは、だな、18 年だから、5 年。5 年くれえ前だな。補助事業で団地でハウス団地造ってやったの。ほれもみんな津波でみんな持ってかっちゃ、どこさ行ったか分かんね、ハウスは。海の側だったからな。

―キウイの月例会はどうやって始まったんですか。

永井：前の会長が始めたんだから。結局、技術がなかったから、みんなして勉強会やって、技術高めようっていう意味で始まったんだべ。

―新しい取り組みであるキウイ栽培がなぜ上手くいったと思いますか。

永井：うまくいったのはやっぱり、適材適所。さっき言ったようにここでなんでキウイうまくいがねだか、分かんないけどって。大熊ではうまくいったけどっていうのはやっぱり適材適所でねえもな。ほうれん草はもちろん適材適所だけどな、隣でうまくいってたから。結局海岸っぷち、夫沢の俺、作っていたのが原発の側だったから、栽培漁業センターの下だったから。あそこだから、海岸っぷちだから。夏

涼しくて、冬暖かいから。

―やってみたけどうまくいかなかったものはありますか。

永井：トマト。加工トマト。
　あとは高校出たばっかりの頃は、加工大根だわい。大根作ったりやった。大熊も結構やったんだよ。原町のたくわん工場さ、出荷したり。前の前の町長が 30 代の頃だべな。
　大根の上さ乗っかって、原町まで行ったんだわい。今では考えらんにいのが。

―トマトが続かなかったのには理由はありますか。

永井：結局、生産性の問題だ。労力の割には収入が、この割に上がんなかったっていうわけだ。だって加工トマトだもの。生食用でねえもの。
　（大根も）そう。大根は面倒だもの。ちょっと出荷遅れるとおっきくなるから売り物になんねえべし。前の川さ、みんな投げたわや。
　その点、ほうれん草とか、キウイというのはちゃんとそれなりのお金になった。

―これからの大熊町で新しい産業を生み出していく上で、活かせることはありますか。

永井：生かせることは今だから、今が一番チャンスでね、逆に言うと農業は今がチャンスでねえかなって思うだいな。なんでかっていうと、今、結局、原発事故の関係で補助事業も何でも相当あるでしょ。ほの事業を使ってやれば、自己負担少なくて済むべ。それを生かしてやれば、最高の事業できっと思うんですよ。何やっても。今の町長、何、どういうこと思ってっか分かんねえけど。あれは農業畑でねえから、そういうことはちょっと無理。
　だから、この農業においては、志賀秀朗町長は。助成なり何でもやったから、ぐんぐん他の町村よりはいがったわけだ。だから、何でも成功、他でも資金がなくても失敗しているのが多いから。資金はほれ、町がある程度、裕福だったから、大熊は。資金を出してくれたから、助成してくれたから、ある程度、成功もしたわけだ。だから、それが今は逆に、国でも出してくれる、大熊に対してはな。だから、今はチャンスでねえかなと思うんだけどな。こういって、まして、大熊さ帰ってくんだか、分かんねえなんていう人が多いから、土地集めにだって簡単だと思うんだ。今 10 年か、20 年くれえわけかったらやんだけど。

―ほうれん草とかキウイとかは、お金があってできたことですか。

永井：キウイ、ほうれん草はお金って別にかかんねかったから。最後はほら、補助事業で規模拡大したときには、あれは他のとはあれだけど。俺はそんなに広げねかったから。前、広げてたから。俺はそもそも田んぼのハウスがもったいないからって、苗作りのハウスがもったいねえからっつってほうれん草まいたのが始まりだから。苗作り、4 月に 1 カ月使うだけで、あとハウスは 11 カ月空いてっから、そこさ、ほうれん草作るっていう目的で。
　だから、ほうれん草は大熊全部はできねえから、浜でねっかできねえから、大熊では作っとこねえから。

―当時新しいことをするときに、お金以外に何か必要なものはありましたか。

永井：お金以外でか。
　やる気がなくなった。10 年ブランクあっからな。15 年のブランクか。
　もうちょっと若い人でだったら、意気込み出てくるから。考えつくだろうけど。
　今、少しばかりの畑、買い求めて、いろんなの植えてあるけど、そこに行くとやっぱり動きたくなる。動けないけど、何かにやりたくなっちゃうというか、それは身に付いているものなんだよね。

―子どもの頃から土いじりが好きだったんですか。

永井：好き嫌いでねえわい。そこさ生まれたから、ずーっとここやるもんだと思って、高校も農業高校だべし。それを嫌になることはなかったな、ずっとやっていると。
　今、大熊ではそれこそ、三つぐれえに、三つか四つに分けて、法人組織で何かやらなきゃ駄目だわ。農業、でもな農協もおっきくなっちまったからな。小回り効かねえからな。今の農協は。前は大熊は大熊の農協だったから、だから、他は他の町村はあまり農協と役場とは町長とは仲いくねかったんだけど、大熊の場合は、びったり。びったりだったから、何でもツーカーだったから、何でも農業に対してはいかったんだな。

―今から農業を大熊町で始めるのに法人がいいっていうのはどういう理由ですか。

永井：コストダウンだわい。米作ったって、何作ったって。法人でねっきゃ駄目でわい、個人でやったでは。原発っていうハンディあっからな、大熊は、本当にな。結局、このハンディをうまく利用しねっかなんねえからな。それを利用することを考えねっきゃなんねんだいな。

―大熊町の抱えるハンデというのは、安全じゃないって思われることですか。

永井：そう。大体。ただでも、「東電からお金もらってるでしょ」って言われるから。頭っから、そう言われちゃうから。ただ、海さ、水流しただけでも騒いでるのに。だから、そのハンディをないようなものを作ればいいんだいな。
　町は一応、それを考えて、ハウスでイチゴをやっている。ハウスで結局、大規模なキノコ栽培とか、あとは今のはやりの野菜か。レタスとか、ああいうものな。
　太陽光発電は今もやってかな、原町で。自分で電気を起こして、自分の電気であれをやんのな。野菜作って。そういうことを土地はあんだから、だから、そういうふうに太陽光を利用して、発電をして、自分でやって、自分でこういうにやれば、太刀打ちできんでねえかなと思うんだけどな。よその産地と競争しても。ただ、イチゴだけでは。あれは試験だべから、あくまでも。

―農業の面で、どのような若者に関わってほしいと思いますか。

永井：結局は、関わってって、結局は大熊で大熊の産業なり何なりが人を必要とする場所を、場所っていうか、産業っていうか、そういうものが先、作って、人集めして、それからでねっか、若い者は集まってこねえべ。だから、これはわれわれでなく、上のほうの町長、町会議員がやるようなことだ。先言った、俺の言ったようなことのおっきくやって、人の来るようなことをやって、大熊町の人口を増やさ

ねことには駄目よ。人口増やして。
　大体、なんで、大熊も双葉もあれなんだけど、農業さ力いんねえのかな。ただ、当時、解除、解除って騒いでる割には、何にもやんねんだよな。
　だから、何のための解除しんだが、分かんねんだよな、俺は。住むための解除なら、一部解除すればいいと思うんだけど。解除、解除って全面解除すんだら、結局、農業でも何でもやるようにしたらいいと思うんだけど。やっぱり、何だかんだいって、人は集まるようなことやらねっきゃ駄目よ。

　だからさっき言ったように、私はずっと農業専門だったら、やっぱりたまに大熊さ戻ってみっと、あの土地がもったいないと思ってんだよな。あれを生かす方法何かないかなと。俺も生かすことを考えるような若者、誰かいないかなと思う。あの土地を。だから、さっき言ったように三つか、四つの法人にして、農業、いろんなことをやってみたら面白いんでねえかなと思って。グループ、四つぐれえのグループを組むでは。おっきくすっと容易でねえから、ちんちゃくてもまた同じだしな。
　ちょうど、あまり大きくねえように、三つか四つくれえな法人して、いろんなこと、あれ、一つだけたら、何か災害あったとき困っから。三つか四つだと、災害、一つおかしくなったって、カバーできっから。今の時代なら、ほういう基礎もできんでねえかなと思って。そういうことをやる若者、いねえかなと思ってるんだ。やっぱり、そういう人に誰か、大熊さ、元気のいい人いねのかな。

※掲載情報は 2023 年 12 月現在のものです。